

MY HOME TOWN MIHARU MY HOME TOWN MIHARU MY HOME TOWN MIHARU

三春わが街

MY HOME TOWN MIHARU MY HOME TOWN MIHARU MY HOME TOWN MIHARU

■コミュニティだより

VOL. 91 (年4回発行)

■発行日 平成31年 3月31日
■発行 三春まちづくり協会
■編集 三春まちづくり協会広報部会
三春町大字貝山字泉沢100-1 (旧若駒寮)
TEL/FAX (62) 3988

『出前懇談会の開催』 「三春戸長(町長)野口勝一の見た明治の三春」 町の歴史をみんなで学びましょう!

二月一四日三春交流館「まほら」に於いて出前懇談会が開催されました。

今回も、歴史民俗資料館主任主査(学芸員)でいらっしゃる藤井典子さんを講師にお招きして、「三春戸長(町長)野口勝一の見た明治の三春」というテーマでお話をいただきました。もと三春戸長(町長)だった茨城県出身の野口勝一を軸に、彼と関わりがあった明治の三春の人々の姿を考えます。三春の人々が何を学び、どんなことを考えていたのか、少し視点を変えて外の人間の目で幕末、明治初期を眺めると、意外なつながりが見えてきそうです。

【藤井典子さんが要旨をまとめた資料によりお話しされた人々の内容は以下の通りです。】



野口勝一とは…明治の政治家、ジャーナリスト

嘉永元年に生まれ。現茨城県北茨城市町出身。父は水戸藩の郷土。水戸天狗党

(明治二十二年の市町村制施行により廃止)

明治四年に制定された戸籍法に基づき、戸籍事務の役職者として置かれることになった。明治五年の太政官布告により、地域の統括責任的な役割を背負わされることになった。

その権限は国税徴収、滞納処分、公共事業の起工、徴兵、戸籍、布告、布達の伝達、義務教育、水利土木など。全国的に、戸長となった人は、自由民権運動とかかわりのあった人が少なかつたといわれる。国の出先として活動しつつも、地域のことをよく知る人間が着任することが多かったためとされているが、三春の場合には、野口、河野、松本茂と自由民権運動家が戸長を務め、野口は河野が画策した政治結社・三師社に参加し、後に自由党として国政に出た。

水利土木

警前県は明治六年六月から地租改正に着手し、土地の丈量調査、図面作成、等級調査などが行われる予定であった。事業は福島県に引き継がれたが、地下査定額などは実質官側からの押

し付けとなるが多かつた。特に三春町は戦火に遭わなかつたことなどから、周辺市町村の倍以上の査定を押し付けられた。しかし、丈量調査や図面作製は、佐久間庸軒門下の人々があつたつていた(庸軒塾の免許皆伝は、洋算風という、代数・幾何・測量という分野に分かれていると思われる)。

佐久間庸軒が三春藩講所で和算を教えたという記録があるが、庸軒の和算塾は大町地区内に存在したらしい。三春町内では明治、大正に至るまで、和算という日本で大成された学問に親しみ、実地に活用することが可能であつたのである。

熊田淑軒も長崎まで蘭学を学ぶために行つていたと言うが、庸軒も自分の足で長崎まで歩いた一人である。天保十三年は岡山まで、安政五年には長崎まで歩き、行き帰りと和算を教授したり、他門の和算家が上がった算額を見たり、そうした人々と交流したりしている。

公共事業…産馬会社

三春産馬を再生させるため、影山正博と松本芳長は、外国産の馬を買い入れることを実行に移す。結果的には三春駒の原形をとどめることはできなかつたが、皇室等の買い上げ馬が増え、明治の一時期に産馬による山野の活用、競馬による経済の活性化は図ることができた。影山らは「世界に通

用する馬」の生産をもくろんでおり、それはその後牛や綿羊などの生産へとつながっていく。なお、野口らが戸長であつた明治十一年ごろからは、第九十三国立銀行が設立され、三盛社や三春煙草会社など、民間からの会社設立などが相次いだ活気ある時代である(しかし、その活況を長く伸ばさせることができなかつた)。



教育…義務教育

明治四年に藩講所が廃止されると、旧藩の有志によつて養才義塾設立の請願が警前県へ寄せられた。教授は熊田淑軒が行つた。やがて、学制の発布と共に解消となる。明治六年第一番三春小学校(男子)、遅れて第二番三春小学校(女子)が、学制に基づき設立される。また、これに合わせて、小学校教員養成のための師範学校も設けられた。

英語教育

明治十二年に予科学校か

思想…熊田淑軒の反射炉と大日本史

熊田嘉膳、号は淑軒である。三春藩領内の岩井沢村に生まれ、藩医熊田家の養子になった。二本松藩の小此木玄智に医学を学んだ後、江戸に出て坪井信道に西医学を学んだ。嘉永六年のペリール来航に際し、志願して浦賀に視察に出る。そののちは長沼流兵法を学び、大砲製造の研究にあつた。安政三年、水戸藩の反射炉建設・大砲製造の計画に招かれ安政六年に三春へ戻る、会津や相馬藩の招きに応じている。

戊辰戦争では山地立国とともに京へ上り、岩倉具視を紹介し、藩主名代で新政府に嘆願書を提出、恭順の意を明らかにしている。この熊田嘉膳が褒美として得た大日本史は今も保存されている。

【舞鶴城址（お城山）の露頭にみる

大地の変遷

―地層の成り立ちの違いについて理解を深める―

【周辺の地形の概要】

三春町の舞鶴城跡は標高四〇〇m程度ですが、町の市街地が標高三〇〇mの谷部に位置し、その周辺の台地部が概ね三〇〇m程度の高さを示すのに対し、これよりもさらに約二〇m高い「ピーク」を示すのが特徴です。このような地形的な優位性を利用して城塞を構えたことが伺えます。この舞鶴城がいつごろ築城されたかはわからないようですが、史料上はつきりしていることは、永正年間（十六世紀初頭）に田村義頭が守山城（福島県郡山市）より舞鶴城に本拠を移したといわれています。戦国時代の舞鶴城は、山頂部分の本丸に城主居館を置き、それを中心に郭を配置した典型的な山城であったようです。

【周辺の地質の概要】

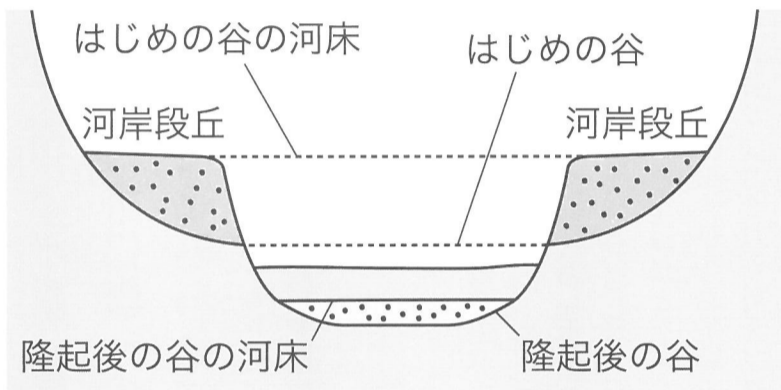
阿武隈山地に広く分布する、主として中生代白亜紀に生成した花崗岩の分布地域であり、基盤岩として分布しています。ここで見られる花崗岩は、黒雲母と比較的粒子の大きい石英を含むことを特徴とする新期花崗岩と呼ばれています。

標高三六〇m〜三七〇m付近には、平坦面を形成して砂礫及び砂層が分布しています。更に、その上には厚さ二〇m程度の高熔結凝灰岩が急岩癖崖として分布しています。この熔結凝灰岩の分布域は、城跡付近にのみ見られ、周辺より高さが二〇m程度高い狭いピークをなしているのが特徴です。この砂礫層と

擬灰岩層からなる地層は、「白河層」と呼ばれています。

【なぜ砂礫層が存在するか？】

三春町の舞鶴城址（お城山）の道路沿いの標高三六〇m〜三七〇m付近に、砂礫層（すなとレキが混ざった地層）が分布しています。このような砂礫層は、一般的には段丘水石層と呼ばれ、河川の側方浸食が盛んな時に堆積し、その後下方浸食によって川底が下がったため、川床よりも高いところに平坦な面として残ったものを指します（図-2参照）。



土地の相対的な隆起によって谷が若返り、堆積が行われていた河床が下方浸食され、両側に河岸段丘ができる

図-2 段丘のできかた

【白河層の地質学の意義について】

三春町付近（大滝根川流域）の場所は、阿武隈山地に位置し、中生代白亜紀に生成した花崗岩に分布地位置で比較的地殻変動がゆるやかな地域であることが知られています。白河層の中の砂礫層を河川によって作られた段丘堆積と考えると、現在の河道と比べて比高差が七〇m以上ある高いところに段丘堆積物が存在することになり、地殻変動が緩やかであることと大きな矛盾があるように思われます。

ですが、白河層の年代（二一〇万〜一九〇万年と推定）と隆起量（一一〇〜二〇〇mと推定）から計算すると、おおむねその隆起速度は、一m/一〇、〇〇〇年オーダーとなり、阿武隈山地の西縁部の緩やかな隆起を実証する代表的な露頭であり、三春町周辺の地形地質の生成の歴史を知るうえで重要なものとなっております。

鈴木 武

部会だより

「生涯学習部会」
講演会に参加して
生涯学習部会

遠藤 光子

龍徳院本堂で、御住職平林可善様の公演をお聞きしました。初めに龍徳院の歴史についてお話があり、三春藩主秋田家の菩薩寺の一つであり、三春城を守る為の出城を兼ねて建立されたことを学び、歴史の重さと深さを感じました。

その他のお話の中で、私が一番興味を持ったのは「エンディングノート」の内容です。特に医療、告知や延命措置の記入については、考えただけでもドキドキしてしましますが、意思表示しておくべきであると思えました。又、介護についても、どこで、誰の介護を受けたいか、切実な問題です。

三春の歴史、自分の終活等いろいろと考えさせられた講演でした。ありがとうございました。



編集後記

最近の気象状況は、突然突風が吹いたり、寒暖の変動が激しかったり何かおかしい。この冬は雪も少なく、これからの季節、水不足にならないか心配です。▼以前の三春町の気候的環境は全般的に温暖湿潤で四季が明瞭であり、冬季の降雪積雪も少なく移住や交通に対してそれほど障害にならず住みよい環境ということができ、しばしば冷害に見舞われることがあるが、本州各地で栽培される農作物は大抵栽培可能であるようだ。▼地産地消により郷土料理の原点である自給自足で作物を栽培して、イモ柄・コンニャク・大豆製品・山菜・カヤ・ナラ・トチ・クヌギなど凶作だった時に身についた粗食と主食の節約の心を強く持っていたため三春の農村、神社、寺院にカヤの木が多く見られるらしい。▼春になれば滝桜をはじめ一面桜模様になり郷土料理などで観光客の方々をおもてなしして、それが起爆剤となり通年型観光へとつながればよいと思います。

（渡邊和江）

コミュニティだより
「三春わが街」第九十一号
発行日 平成三十二年三月三十一日
発行 三春まちづくり協会
編集 三春まちづくり協会
広 報 部 会
三春町大字真字泉二〇一
(六二) 三九八八